

黎明期を知る放送第一世代による「メディアウオッチング」活動の軌跡 ～現役放送人へのメッセージ～

まず活動の軌跡をご紹介する前に、今般、2008年秋から15年間続けてきた「メディアウオッチング」の活動母体そのものを終結（2023年10月）させることにしたことをご報告いたします。

関西民放クラブの中では、ちょっと異色の同好会「放送を考える会～メディアウオッチング～」は、生涯放送人という意識を絶やさないOB・OGのメンバーたちが、テレビ、ラジオ、そして新聞を核にして、メディアを総合的にとらえ直そうとの趣旨でウオッチングを続けてきました。しかし、コロナ禍の影響で、実質的には2020年2月以降、定例の会を開催できない事態が続いており、さらに会を運営する世話人（4名）の高齢化も進み、いわゆる「3密」回避の中での会合を開くことが難しくなりました。つまり今後とも、新型コロナウイルスの拡大による「3密」のしほりから完全に解放されることなく、且つ感染の100%収束も見通せない状況に陥りました。従って、ここに心ならずも「メディアウオッチング」の活動終了との結論に至った次第です。

さて15年間続いた「メディアウオッチング」の活動の最大の目的はというと、「例会（研究会）」や「聞き取り調査」において語られた言葉（メッセージ）を録音テープに記録し、それを文字化して保存することにあります。

そこで、実際に取り上げたテーマの一部を例示してみましよう。

当初は▼新聞メディアからみた放送▼放送の地方分権▼広告代理店トップのメディア論▼放送倫理から考える放送局のあり方などについて、新聞、広告界の幹部、大学教授といった人達をゲストに招き意見を交わしました。かつて白黒フィルム時代に放送現場を経験したOB・OGが関西の現役の放送マンと、激変するメディア環境について語り合う場面もありました。

そのような活動の中、とりわけ特記すべきこととして、2013年から2年間かけて行った放送人51人の聞き取り調査内容を、『民間放送のかがやいていたころ～ゼロからの歴史 51人の証言』としてまとめ、出版（A5版680ページ）にこぎつけたことが挙げられます。これは、高橋信三記念文化振興基金、並びに放送文化基金の助成を受けた事業活動であり、その目的は、放送メディアがたどってきた産みの苦しみ、葛藤、そして喜びを今どきの若い放送人に形あるものとして残し伝えることにあります。

「メディアウオッチング」はこの書籍出版の際、高橋信三記念文化振興基金事務局に「放送人51人の聞き取り調査研究」（報告書、4冊、1406ページ）を提出しました。以下その膨大な記録の中から一部セレクトしてみました。この中で民間放送が開局した当時から制作、報道、編成、アナウンサー、営業などの最前線で現場に関わった放送人たちが、押し並べて触れていたのが、“これからの放送の有り様について”であります。即ちOB・OG放送人から現役放送人に宛てたメッセージだということが言えます。

OB・OG 放送人（60 歳代から 80 歳代）から現役放送人へ贈る言葉です

ラジオは「くつろぎ、楽しみ、教養」を与える

◎メディアの役割は「くつろぎ、楽しみ、教養」を与えるもの。時代の変化が激しいので、音声放送だけのラジオは、パワー的には苦しい状況にある。将来どうなっていくのか想像つかない。だが時代が変わっても、便利な道具が出来ても、それを使いこなす社会が出来るといふ変化があっても、使っている人間自体が基本的には人間であることに違いない。その人間に対して、何かプラスになる「くつろぎ、楽しみ、教養」なりを与えるメディアとしての放送は、絶対、存続する。今の時代で姿を変えて永久に続くだろうと思う。一方、テレビは、個人の趣味が大きく影響するメディアである。

(ラジオプロデューサー)

90 歳の医師が訴える“民放で働く職員 危機感を持つ”と

◎私は、今 90 歳ですから、見るという、機能が失われていく。残るのはラジオかな。

短い言葉で、パッと言うラジオがあっても良さそうやけど。

◎僕は、民放の果たすべき役割をかたくなに作り上げて欲しい。民放ならではのものが絶対ある。それはなぜかと言うと、視聴者が主人公であるから。これは政治と一緒に、国民が主体者だという風に、どんな政治・政党が出てこようとも、共産党であろうと、自民党であろうと、そう。国民が主人公だという考え方でね、放送が行われないと、「教えた。知らせた。」「治してやる。治してもらおう」という、ここの医療しか出てこない。これは本当の民主主義ではない。

◎民放で働く職員の皆さんが、これに対して反論と言いますか、これではあかんという危機感を持つべき。持たないと滅びてくる。

(ラジオパーソナリティ)

テレビは「生」 もっと自由奔放に作れ

◎やっぱりテレビは「生」だと思う。「生」を使ってもっと視聴者に訴え、働きかける番組が、自由奔放に作れたらいい。これはいかん、あれはいかん、あれを出せ、これを出せと言うのであれば、もう放送人の命を絶っているようなものだ。

(制作プロデューサー)

◎各社とも生放送の番組がいっぱいありますが、生放送に全然見えないという不思議さ。

例えば、ワイドニュース、これ生放送なのか、録画なのか分からない。これ一体、何なの、皆さん上手ですしね。司会者も上手ですし、コマーシャルの入れ方も上手ですし、とちりません。もう生とは見えない。生に見えないということは、生で放送しなくてもいいんじゃないかと思ってしまう。苦労して生でやっているのに、生放送に見えていない。生が生であるように見えない（見せなきゃ）あかんのとちやうか。ニュースは特に生に見えなきゃダメですよ。だからそれは、わざとでもいいから、生であるという風に見せるべきだ。ところが、スタッフがやっている努力の大半は、生ではないという風に見せる努力なのです。今の努力を見ていると、よく分からんというのが、私の今のテレビというものに対する一つの印象です。

(報道プロデューサー)

◎(スポーツの魅力は)それは「生」でしょ。いわゆる場内の感動。野球でもサッカーでもラグビーでもあるはずなんです。そのときの音声。音声はテレビではまだまだ未熟。BGMの使い方にしてもね、もうちょっと、ええもんが出せるはず。こんなにBGMを聞かさないで、いいのにといいシーンがある。

ボクシング、相撲にしても、音声にもっと配慮すべし。相撲でもあれだけ当たってるのに、もう一つ頼りない。あれ、稽古場で見たら、パチーンって行って凄い音だよ。僕はいろんな練習を取材したけれど、相撲の稽古場ぐらい、厳しくて緊張するものはないですよ。朝早くから砂まみれになって、ガシーンガシーン。親方がデーンとって。「ヨッセ！ヨッセ！」とか言ってね。あのビシーンっていう音は拾っていないなぜかなと思う。ボクシングと相撲ほど、前で見ろって言うんですけどね。ボクシングでも、パンチがピシッ！と凄い音がするんですよ。それがゼロ。あんなはずない。

(スポーツプロデューサー)

メディアの仕事の本当の目的とは

◎我々の仕事は権力のチェック。それが第4の権力と言われて、それにおごることでメディア批判が出て来る。だから、我々も謙虚にならないといけないけれども、政治権力のチェックをおざなりにすると、世の中全体がおかしくなっちゃうという矜持は持っていないといけない。しかし、若い人、特にネットの世論というのは、猛烈に右に吹いているということによって、ネットの世界で批判されるのは権力ではなくて、メディアだという感じはこのところ、かなりありますね。

我々は現実の皮を1枚めくったところにある、本当の姿をえぐり出すこと。その作業を、我々がやらなかったら、メディアとしてちゃんと仕事をしていないんじゃないかなと言われる。それは、その結果が政治権力のチェックにつながるかも分からないけれども、政治権力のチェックをすることが目的ではなくて、現実のおもてに漂っている、ここを1枚めくったところにある、時代の本当の姿をえぐり出すということをや。そういうことを続けていけば、視聴者の皆さんに信頼される結果につながるのではないかな。

(報道プロデューサー)

今のテレビに注文

◎まあ、おもしろくないや。もう皆、やり尽くしたみたいなどこあって、ほんま、個性が大事な。一人が仕切らなあかんわな。合議制ちゅうのはあかんで。一人でいろいろして、一人でももちろんネタ繰りやって、出演者も決めて、やらなあかん。合議したら、皆、ええように丸くなってしても、角が取れてまうねん。角取れたらあかん。角のあるやつに。

(報道プロデューサー)

◎放送局にクリエイティブな作り手がない。

◎サラリーマン化した無難なものしか作れない、傷つきたくない、失敗したくない人ばかりになってしまった。

◎放送局が画一的なもの作りをする管理会社になってしまった。

◎番組を外部のプロダクションに発注する権限を持った人間はいるものの、きちっと目利きの出来るセンスのある制作者がない。

◎放送局は、コスト意識を持ちつつ、芸術性についても理解のある人物を育てるべきだ。

(制作プロデューサー)

以上